

女子大学生と母親の下着の着用意識について

香川幸子, 盛田真千子, 杉山真理*, 小林茂雄*

(文化女子大学家政学部, * 共立女子大学家政学部)

平成4年3月6日受理

A Comparison of Awareness toward Underwear Items of University Women and Their Mothers

Sachiko KAGAWA, Machiko MORITA, Mari SUGIYAMA* and Sigeo KOBAYASHI*

*Faculty of Home Economics, Bunka Women's University, Shibuya-ku, Tokyo 151*** Faculty of Home Economics, Kyoritsu Women's University, Chiyoda-ku, Tokyo 101*

The purposes of this study were to compare awareness toward underwear items of university women and their mothers and to examine relationships between the awareness and social psychological characteristics. Data were provided in a self-administered questionnaire by 200 university women and 166 mothers. The questionnaire included a measure of awareness to underwear items (28 variables) and a social psychological characteristic measure (13 variables).

Results obtained are summarized as follows:

1) University women were more interested in the current fashion of the underwears and less concerned about functional or practical aspects of them than were their mothers.

2) Responses to the awareness to underwear items were factor-analyzed separately for the women and their mothers, yielding nine factors: high-grade intention; norm consciousness; taste and preference; and so on. There were significant differences in the scores generated for eight of the nine factors between the women and their mothers.

3) Significant relationships existed in some factors of the awareness and social psychological characteristics.

(Received March 6, 1992)

Keywords: comparison 比較, underwear item 下着, social psychological character 社会心理的特性, university woman 女子大学生, mother 母親, factor analysis 因子分析.

1. 緒 言

ファッションの多様化は、現代の衣生活において個性化、差別化を進行させ、服装に対する意識も大きく変革している。かつての工業化社会は、消費者の物質的欲求水準を上昇させたが、今日の脱工業化社会は、精神的欲求を増大させた。そのため機能の充実は無論であるが、それ以上に感性的要因が重視される傾向にある。下着においても、ファッション化が一段と進んでおり、デザインや色も増え、次々に新しい提案が試みられている。だが、工業化社会に生まれ育った年代と、脱工業化社会の物質的過剰の最中に生まれた年代とでは、下着に対する価値観、選択、着用などに相違がみられると思われる。また、下着は表着のように見えるわけではない。そこで、

下着の着用に関連する面が、個人の持つ社会心理的特性からも、さぐれるのではないかと考えた。

下着は体型を整えるファンデーション(補整着)と、保温、吸汗を目的としたアンダーウェア(肌着)、装飾性を重んじるランジェリー(装飾下着)に大別されるが¹⁾、本報では、これらを総括的に下着といている。下着の着用意識の研究は、いくつかあるが²⁾³⁾、若い世代と年齢層の違いを比較したものは少ない。そこで、本報では女子大生とその母親の二世代を対象として、着用意識や社会心理的特性との関わりについて、世代間の特徴を実証的に明らかにするため検討を試みた。

2. 研究方法

(1) 調査方法

東京都内の女子大生 200 名とその母親 166 名を対象に、1989 年 10 月から 11 月に質問紙調査法により調査を行った。女子大生は集合調査法、母親は留置調査法により実施した。調査内容は次の個人特性と下着の着用意識からなる。

1) 個人特性

基本属性では、被調査者の年齢は、女子大生については年齢を自由回答法で、母親は該当する年齢と職業を選択法で回答を求めた。また、社会心理的特性では、鈴木は服飾、化粧などの流行行動を規定すると考えられる社会心理的諸要因を整理して変数化するなどの研究において、社会心理的スケールを開発している⁴⁾。そのなかから、本報では下着に関する態度や行動により関連がみられると推察される同調、情報欲求、自己顕示欲、好奇心の 4 スケールをもとに、被調査者の社会心理的特性を調査した。同調では「何をしても周囲のひととあまり違ったことをしないように心掛けることは良い」など 4 項目に対して 4 段階尺度（全然そうでない、あまりそうでない、だいたいそうである、まったくそうである）、情報欲求では「どんなことでもできるだけ詳しく徹底的に知ろうとする」など 3 項目に対して 4 段階尺度（同調と同尺度）、自己顕示欲では「人々の注目的になることが好きだ」など 3 項目に対して段階尺度（はい、いいえ）、好奇心では「友達がなにか変わったものを持っているとすぐ欲しくなる方だ」など 3 項目に対して段階尺度（自己顕示欲と同尺度）を用いて評価を行った（Table 1）。

2) 下着の着用意識

下着の着用にあたっては、室温調節が自由にできる昨

Table 1. Four sub-scales of social psychological characteristics

同調	1. 何をしても周囲の人とあまり違ったことをしないように心掛けていることは良い。 2. 世の中で一番大切なことは、みんなが仲良く力を合わせてやっていくことだ。 3. あなたは何かしようとする時、それをすると他の人たちがどう思うかということについて考える方ですか。
情報欲求	4. あなたは自分の考えがまわりの人たちと違うと、やはり自分の方がおかしいかなあと思うことがありますか。
自己顕示欲	1. どんなことでもできるだけ詳しく徹底的に知ろうとする。 2. 一般に何か他人が知っていて自分が知らないことがあると、非常にはずかしい。 3. 他人が知っていて自分が知らないことがあると、その反対もあるのだから少しもはずかしいと割りきって考える方だ。
好奇心	1. 人々の注目的になることが好きだ。 2. 有名人と知りあいたいと思う。 3. 何人かで話しをする時は、いつも中心にならなければ気がすまない。
好奇心	1. 友達がなにか変わったものを持っているとすぐ欲しくなる方だ。 2. 趣味やレジャーなど、なんでもすぐ手を出すのが長続きしない。 3. 同じ物をいつまでも使っているとすぐ飽きてしまう。

今、薄着が習慣化され、下着は必要最小限に止められる傾向にあると考えられる。本調査と同じ被調査者を対象とした下着の着用実態の調査でも、下着の軽装化は、若年層で進んでいることが認められ、女子大生と母親の着用傾向に相違がみられた⁵⁾。そのため、生理衛生・体型補正などの機能面のほかに、ファッション性、購買行動規範性、経済性などを含めた 28 の質問項目を設問し、下着の着用意識について、4 段階尺度により回答を求めた（後出 Fig. 2 参照）。なお、本報では、下着の着用意識を下着を着用していることを主に、将来的な着用の意志をも含めて考えた。

(2) 集計・分析方法

基本属性については項目別の単純集計を行った。また、社会心理的特性では各特性ごとに得点化したものを社会心理的尺度として求めた。この場合、得点の算出は各質問項目において同調および情報欲求では、「全然そうでない」から「まったくそうである」に至る 4 段階尺度に 1～4 点、自己顕示欲および好奇心は、「はい、いいえ」の 2 段階尺度 0～1 点を与え、それをもとに各特性ごとの単純集計を求め、さらに母親間の違いをみるために χ^2 による検定を行った。下着の着用意識では「全然そうでない」から「まったくそうである」に至る 4 段階尺度に 1～4 を与え、単純集計を求め、学生と母親間の違いをみるために平均値の差の t 検定を行った。また、下着の着用意識の構造をさぐるために因子分析を行った。社会心理的特性と着用意識の関係については相関分析および平均値の差の t 検定を適用し考察した。

3. 結果および考察

(1) 個人特性

本報で被調査者となった女子大生の年齢は 18～22 歳であった。その母親の年齢は、40 歳代後半が最も多く 48.2%，次いで 50 歳前半が 22.9%，40 歳代前半 18.1%，その他 10.8% で、40 歳代が全体の 66.3% を占めた。また、母親は専業主婦が 54.2%，パートを含む有職者は 41.0% で、専業主婦の占める割合が高かった。

社会心理的特性では同調、情報欲求、自己顕示欲、好奇心それぞれの得点を求め、学生、母親別に集計した。その構成比を Fig. 1 に示す。同調では 9 点から 13 点、情報欲求では 6 点から 10 点の中間層の得点者が両世代ともに多く、同傾向を示しており、世代間の特徴だった傾向はみられなかった。一方、自己顕示欲では 0 点の得点者が学生は 19.5% であるのに対して母親は 68.7%，また、好奇心においても 0 点の得点者が学生は 35.0%

女子大学生と母親の下着の着用意識について

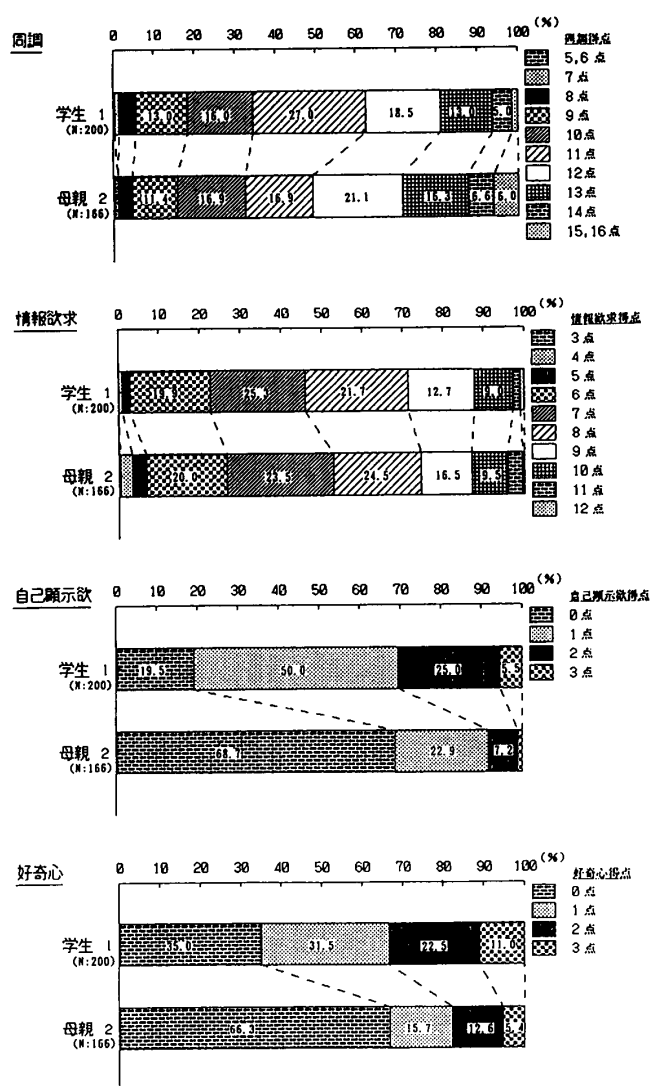


Fig. 1. Comparison of social psychological characteristics of university women and their mothers

であるのに対し母親は 66.3% であるように、母親の方が得点が低い被調査者が多く、世代差がみられた。なお、人数の頻数をもとにして行った χ^2 検定でも、自己顕示欲および好奇心には世代間の危険率 1% で構成割合に有意差が認められた。一方、同調および情報欲求には世代間の有意差は危険率 5% で認められず、学生は母親にくらべ、自己顕示欲と好奇心が大きかった。

(2) 下着の着用意識

下着の着用意識について、学生、母親別に平均値を求め、さらに、学生と母親間の着用意識の違いをみるために、平均値の差の t 検定を行った (Fig. 2)。その結果、28 項目のうち、11 項目には危険率 5% で有意差が認められず、これらの項目については学生と母親間に着用意識の違いがみられなかった。中でも「(13) 汗をかいた時は下着をまめに着替えたい」、「(12) 必要最小限の下

着用傾向は時代の流れのなかで当然だと思う」、「(6) 下着は特に女性らしさを感じる」には学生、母親ともに平均評点が高く肯定的に反応していた。一方、「(18) 下着は見えない物なので、安価な物ですませたい」、「(20) 装飾的な豪華な下着を楽しみたい」は学生、母親とも平均点が低く、否定的に反応していた。

これらにより、発汗時において下着に衛生機能を求める欲求や女性らしさを感じさせる下着の心理的效果には世代的相違はみられなかった。また、下着の省略化は時代の流れであると学生、母親ともに認めている。価格に対しても、下着を安価なものでよとする意識は両世代ともに低く、物の豊かな社会を背景として高級志向が下着にも求められていた。しかし、装飾性や豪華さには消極的に反応しており、快適感のある T.P.O に応じた下着の着用を求めている。

一方、世代間に有意差が認められた 17 項目のうち、平均評点が特に高い項目は「(9) 下着の色は清楚であるべきだ」、「(15) 下着の肌触りに非常に敏感である」、「(17) ガードルは強い締め付けがない物であれば着用したい」であるが、これらの項目はいずれも母親の評点の方が学生より肯定的に反応している結果であった。また、平均評点が特に低い項目の中で、学生の平均評点の方が母親より低い項目は「(25) 身体を自由にしてほしいので外出時でもブラジャーはつけない」であった。母親の平均評点が学生より低い項目は、「(19) 着こなしによっては下着を故意に見せてもよい」、「(1) 自分の下着着用の習慣は母親の影響を受けていると思う」、「(24) デザインや装飾性によって下着であっても時には上着風に着こなしたい」、「(23) 時には大胆なデザインの下着を身につけたい」、「(7) 着るつもりがなくてもカラフルな下着を集めたい」であった。

母親は下着本来の目的である生理衛生や整容、活動性など、下着の実用性を重視する傾向が認められたが、学生は母親に比べ高級志向やデザインなど感性的要因に関心がむけられていた。また、下着の表着化や大胆なデザインの下着着用に対しては両世代ともに否定的であった。すでに下着の表着化は進行するという将来的予測がされ、下着メーカーなどでも表着的要素を下着に取り入れる⁶⁾など様々な提案が行われている。しかし、現時点では両世代とも下着に対する規範意識からの逸脱には抵抗がみられ、特に母親でその傾向は強く示された。一方、下着の着用習慣形成における母親が与える影響については、両世代ともにその影響は少なく、母親の世代ではそれがより顕著であった。

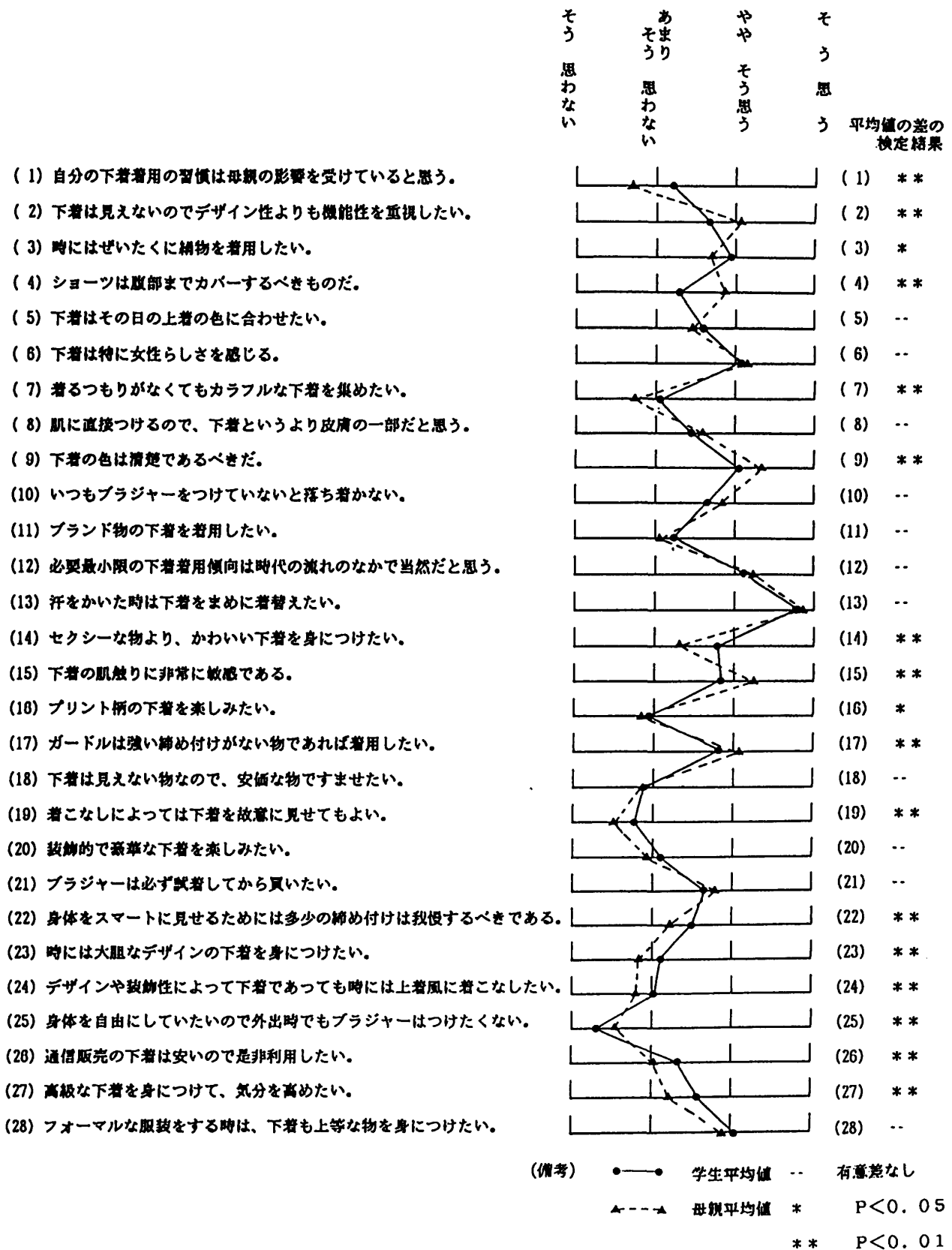


Fig. 2. Differences in the mean scores of the awareness to underwear items between university women and their mothers

女子大学生と母親の下着の着用意識について

Table 2. Sorted factor loading matrix of the awareness to underwear items

質問項目	第1	第2	第3	第4	第5	第6	第7	第8	第9
27 高級な下着を身につけて、気分を高めたい。	0.775	0.011	0.007	0.083	0.143	-0.017	0.132	0.064	-0.079
28 フォーマルな服装をする時は、下着も上等な物を身につけたい。	0.742	0.108	-0.048	-0.048	0.067	-0.042	0.162	0.081	-0.128
3 時にはぜひたくくに絹物を着用したい。	0.636	-0.110	0.134	-0.039	-0.022	-0.102	-0.071	-0.029	0.166
11 ブランド物の下着を着用したい。	0.498	-0.086	0.236	-0.085	0.189	0.104	0.132	-0.035	0.154
9 下着の色は清楚であるべきだ。	0.015	0.721	-0.122	-0.056	-0.001	-0.117	0.099	0.102	0.066
17 ガードルは強い締め付けがない物であれば着用したい。	0.355	0.415	0.060	0.059	-0.372	-0.040	-0.108	-0.044	-0.133
2 下着は見えないのでデザイン性よりも機能性を重視したい。	-0.243	0.413	0.127	0.249	-0.243	0.281	0.340	0.147	0.131
18 下着は見えない物なので、安価な物ですませたい。	-0.235	0.382	0.263	0.078	0.245	0.173	-0.241	0.125	-0.329
16 プリント柄の下着を欲しみたい。	0.107	0.045	0.755	0.073	-0.002	-0.011	-0.087	0.016	0.013
14 セクシーな物より、かわいい下着を身につけたい。	-0.013	0.058	0.607	-0.272	-0.099	-0.013	0.062	0.290	-0.218
7 着るつもりがなくてもカラフルな下着を集めたい。	0.204	-0.299	0.602	0.094	0.172	-0.004	0.135	0.084	-0.053
25 身体を自由にしたいので外出時でもブラジャーはつけたくない。	0.007	0.011	0.042	0.743	0.078	0.047	-0.067	0.020	-0.086
4 ショーツは腰部分までカバーするべきものだ。	-0.138	0.482	-0.055	0.514	-0.135	0.035	0.212	0.103	0.047
10 いつもブラジャーをつけていないと落ち着かない。	-0.014	0.424	0.377	-0.463	0.140	0.067	-0.049	-0.271	0.150
22 身体をスマートに見せるためには多少の締め付けは我慢すべきである。	0.024	0.073	-0.061	-0.132	0.755	-0.010	0.103	0.030	-0.195
23 時には大胆なデザインの下着を身につけたい。	0.446	-0.130	0.110	0.095	0.585	-0.034	-0.074	0.058	-0.046
20 装飾的で豪華な下着を集めたい。	0.469	-0.060	0.072	0.214	0.481	-0.053	0.064	-0.000	0.167
24 デザインや装飾性によって下着であっても時には上着風に着こなしたい。	0.303	-0.059	0.265	0.253	0.412	-0.269	-0.107	-0.139	0.038
19 着こなすことによって下着を故意に見せてもよい。	0.222	-0.164	0.261	0.347	0.384	-0.153	-0.188	-0.146	-0.022
5 下着はその日の上着の色に合わせてたい。	0.048	-0.051	0.012	0.058	0.019	-0.781	-0.057	0.021	0.019
13 汗をかいた時は下着をまめに着替えたい。	-0.083	0.198	-0.059	-0.169	0.083	-0.509	0.353	0.034	-0.045
6 下着は特に女性らしさを感じる。	0.387	0.069	0.083	-0.045	0.014	-0.417	0.023	0.025	0.210
12 必要最小限の下着着用傾向は時代の流れのなかで当然だと思う。	0.182	0.066	0.160	-0.057	-0.146	-0.147	0.685	-0.225	-0.064
21 ブラジャーは必ず着用してから買いたい。	0.164	0.017	-0.107	0.030	0.192	0.055	0.517	0.073	0.160
1 自分下着用の習慣は母親の影響を受けていると思う。	0.104	0.095	0.094	0.022	-0.013	0.024	-0.133	0.808	-0.041
8 肌に直接つけるので、下着というより皮膚の一部だと思う。	-0.011	0.053	0.320	0.153	0.107	-0.287	0.174	0.459	0.213
15 下着の肌触りに非常に敏感である。	0.165	0.308	0.097	-0.014	-0.095	-0.150	-0.014	-0.097	0.564
26 通気販売の下着は安いので是非利用したい。	0.098	0.166	0.324	0.134	0.059	-0.074	-0.131	-0.147	-0.615
因子寄与率 (%)	10.5	6.4	7.4	5.5	7.0	5.1	4.8	4.4	4.7

次に下着の着用意識の構造をさぐるために、因子分析(主因子法)により解析した。まず下着の着用意識 28 項目を変数に被調査者を観測回数として、学生、母親のそれぞれについて因子分析(固有値 1.0 以上、バリマックス回転)を行った。その結果、両世代とも因子寄与率のウェイトは多少異なるが、ほぼ同じ意味内容をもつ 10 個の因子が抽出された。なお累積寄与率は学生では 61.5%、母親では 61.7%であった。そこで学生、母親が各因子に対して、どのような関係にあるかを因子得点をもとに同一次元上で比較検討するために両世代を合わせて因子分析を行った。すなわち下着の着用意識 28 項目を変数に、被調査者 366 人を観測回数としてもう一度因子分析(固有値 1.0 以上、バリマックス回転)を行った結果、9 個の因子が抽出された。その累積寄与率 55.8%であり、因子負荷量 (Table 2) をもとに各因子の解釈を行った。なお、学生と母親の両世代と母親の世代を合わせて因子分析をした理由は、抽出した因子に対して学生と母親の間で反応に差があるかどうかを因子得点をもとに検討するためである。因子得点は各因子に対する各被調査者の関連の強さを示すものであり、変数の測定値=因子負荷量×因子得点の関係があるので、変数の測定値と因子負荷量から因子得点を推定できる。

第 1 因子は「(27) 高級な下着を身につけて、気分を高めたい」などの評価項目に代表され、高級志向の因子と解釈した。その因子寄与率 10.5%であった。第 2 因子は「(9) 下着の色は清楚であるべきだ」などの評価項目より、規範意識の因子と考えた。第 2 因子の因子寄与率は 6.4%であった。以下、第 3 因子は趣味嗜好 (7.4%)、第 4 因子は身体拘束 (5.5%)、第 5 因子は身体誇示 (7.0%)、第 6 因子は装着意識 (5.1%)、第 7 因子は購買傾向 (4.8%)、第 8 因子は習慣性 (4.4%)、第 9 因子は品質評価 (4.7%)、とした。

また、各因子について、学生と母親の世代別に因子得点の平均値を求め、学生と母親間での平均因子得点の違いをみるために、平均値の差の t 検定を行った。その結果、9 因子のうち、危険率 1% で有意なものは第 1、第 2、第 4、第 5、第 8、第 9 因子の 6 因子、危険率 5% で有意なものは第 3、第 7 因子の 2 因子であった (Table 3)。学生は母親より高級志向、趣味嗜好、身体誇示、習慣性の因子得点が高く、一方、母親は規範意識、身体拘束、購買傾向、品質評価の因子得点が高かった。

下着は時代とともにかなり簡略化され、必要最小限に止められる傾向にある⁹⁾。また、下着に対する意識において、上着の色を合わせたいとか、汗をかいた時は下着

Table 3. Differences in the mean factor scores of the awareness to underwear items between university women and their mothers

因子	学 生		母 親		有意差
	平均値	標準偏差値	平均値	標準偏差値	
1 高級志向	0.13	0.94	-0.16	1.05	**
2 規範意識	-0.25	0.96	0.29	0.98	**
3 趣味嗜好	0.11	0.96	-0.13	1.03	*
4 身体拘束	-0.17	0.90	0.21	1.08	**
5 身体誇示	0.13	0.94	-0.15	1.05	**
6 装着意識	0.00	0.97	-0.01	1.04	
7 購買傾向	-0.12	0.98	0.14	1.01	*
8 習慣性	0.20	0.95	-0.24	1.01	**
9 品質評価	-0.24	0.95	0.30	0.98	**

* $p < 0.05$, ** $p < 0.01$.

をまめに着替えたいなどの装着意識には、学生、母親間に世代的相違は生じていない。しかし、規範意識や機能性を重視する傾向の母親に対し、学生はより柔軟な姿勢で下着を受け入れており、世代的相違が示された。若年層の傾向は他世代への影響を与え若年層を中心に意識は今後大きく変容していくものと推察される。

(3) 下着の着用意識と社会心理的特性との関連

下着の着用意識に対する反応は個人の社会心理的特性によって相違するものと考えられる。その検討として、前述の社会心理的スケールの得点と下着の着用意識より抽出された 9 因子の因子得点との間で相関係数を求め、相関係数の有意性の検定を行った (Table 4)。その結果、自己顕示欲は下着の着用意識の因子との間に相関関係が最も高く、高級志向、身体誇示、習慣性では正の有意な相関が示された。また、規範意識と品質評価の因子の間では負の相関がみられた。一方、同調の社会心理的特性では規範意識、趣味嗜好、購買傾向の因子の間に、好奇心では高級志向、身体誇示の因子の間に、情報欲求では高級志向との因子の間で正の有意な相関が認められた。したがって、自己の優越性を強調する自己顕示欲や好奇心が増すにつれ、下着に対する高級志向や性的特徴を誇示する傾向がみられる一方で、社会に同調する傾向の強い者は、既成の下着着用意識の影響を受けていた。また、衣生活に、高級化が進展している社会では、情報を求める欲求が高いほど、下着において、高級化を求める傾向が強いと解釈される。

女子大学生と母親の下着の着用意識について

Table 4. Correlation coefficients between the factor scores of awareness to underwear items and social psychological characteristics

因子	同調	情報欲求	自己顕示欲	好奇心
1 高級志向	0.0410	0.1464 **	0.2015 **	0.1682 **
2 規範意識	0.2884 **	0.0632	-0.1365 **	-0.0890
3 趣味嗜好	0.1311 *	0.0220	-0.0209	0.0682
4 身体拘束	0.0173	-0.0021	-0.0794	-0.0297
5 身体誇示	0.0534	0.0373	0.2181 **	0.1939 **
6 装着意識	0.0203	-0.0023	0.0241	0.0654
7 購買傾向	0.1317 *	0.1005	-0.0286	0.0007
8 習慣性	0.0300	0.0999	0.1989 **	0.0056
9 品質評価	-0.0338	0.0117	-0.1198 *	-0.0748

* $p < 0.05$, ** $p < 0.01$.

Table 5. Differences in the mean scores of social psychological characteristics between plus score and minus score groups of each factor of awareness to underwear items

因子	同調		情報欲求		自己顕示欲		好奇心	
	学生	母親	学生	母親	学生	母親	学生	母親
1 高級志向			-	-	*	-	*	-
2 規範意識	**	*			-	-		
3 趣味嗜好	*	-						
4 身体拘束								
5 身体誇示					-	-	-	**
6 装着意識								
7 購買傾向	-	**	*					
8 習慣性					-	-		
9 品質評価					-	-		

* $p < 0.05$, ** $p < 0.01$.

次に、学生、母親について社会心理的得点の平均値を求め、因子得点のプラスとマイナスの2グループ間で平均値の差のt検定を行った (Table 5)。その結果、自己顕示欲で学生のプラスの被調査者 ($\bar{x}=1.28$) とマイナスの被調査者 ($\bar{x}=1.00$) において高級志向の因子に危険率5%で有意差が認められ、高級な下着を志向する学生は自己顕示欲が強いことが示された。同調では規範意識の因子で、学生・母親ともにプラスの被調査者 (学生 $\bar{x}=11.58$, 母親 $\bar{x}=11.70$) とマイナスの被調査者 (学生 $\bar{x}=10.58$, 母親 $\bar{x}=10.89$) 間に危険率1%で有意差が認められ、下着に対する規範意識の高い学生や母親は同調しやすい傾向がみられた。また、学生では趣味嗜好の

因子でもプラスの被調査者 ($\bar{x}=11.27$) とマイナスの被調査者 ($\bar{x}=10.75$) で危険率1%で有意差が認められ、趣味性の高い下着を好む学生は同調得点が高い結果となった。この点は趣味性の高い下着の嗜好者は同調得点が低いとする予測と相違するため、さらに検討が必要である。好奇心では学生は高級志向の因子でプラスの被調査者 ($\bar{x}=1.24$) とマイナスの被調査者 ($\bar{x}=0.88$) 間で危険率5%、母親は身体誇示の因子でプラスの被調査者 ($\bar{x}=0.82$) とマイナスの被調査者 ($\bar{x}=0.38$) で危険率1%で有意差が認められた。高級な下着を志向する学生や身体誇示を望む母親は好奇心が強い傾向がみられた。一方、情報欲求においては学生、母親間別では両世代ともに有意性は認められなかった。

以上より、下着の着用意識において社会心理的特性は高級志向や規範意識、身体誇示などと関連し、なかでも自己顕示欲は最も多く下着の着用意識と相関が認められた。また、年齢的には若年層では自己顕示欲は下着の高級化を志向することと関係があり、好奇心においては、若年層では下着の高級化、中年層では身体誇示と関係が示されるなど、年齢的要因による相違も認められた。このように社会心理的特性は下着の着用意識に影響を与えており、下着の着用意識を探る場合の重要な要因であるといえる。

4. 結 語

下着の着用意識について、特に社会心理的特性との関連に女子大生と母親の二世世代を対象に、質問紙調査法により調査を実施し、それらの関連を検討した。

(1) 女子大生は下着のファッション性に重視する傾向があるのに対し、母親は下着本来の目的である生理衛生や整容など機能性、実用性により強い関心を持っていた。

(2) 両世代間の下着の着用意識について因子分析を行い、9因子を抽出した。第1因子の高級志向、第2因子の規範意識、第3因子の趣味嗜好、第4因子の身体拘束、第5因子の身体誇示、第6因子の装着意識、第7因子の購買傾向、第8因子の習慣性、第9因子の品質評価であり、各因子の因子得点では第6因子以外の8因子で世代差が認められた。両世代ともに下着の快適感、T.P.Oによる下着の使い分けを求めていたが、下着の表着化には否定的であった。

(3) 下着の着用意識の因子は社会心理的特性の相関で、第4因子と第6因子を除いた7因子で、高級志向、規範意識、趣味嗜好、身体誇示などに有意差が認められた。また、因子は自己顕示欲との間に相関関係が最も多くみ

られた。

なお、本研究は平成2年度(註)日本家政学会第42回大会で報告したものに、さらに検討を加えまとめたものである。

本研究にあたり、御協力をいただきました東京家政学院大学井上和子先生、田中弘美先生、元山梨大学矢崎浄子先生に深く感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 被服文化協会(編): 服装大百科事典上巻, 文化服装学院出版局, 410~415 (1969)
- 2) 幡野暁子: 日本衣服学会誌, 31(2), 16~22 (1988)
- 3) 中川早苗: 繊維機械学会誌, 34(2), 9~19 (1981)
- 4) 鈴木裕久: 化粧文化 No. 5, ポーラ文化研究所, 東京, 33~52 (1981)
- 5) 井上和子, 田中弘美: 東京家政学院紀要第31号, 73~79 (1991)
- 6) 日本生活文化史学会(編): 生活文化史, 雄山閣, 東京, 60~64 (1984)